とりもえぬ魚の心を恥もせでうのまねしたる烏川かな

〔慶長見聞集三〕法林寺説法を烏きく事

江戸法林寺上人の談義殊勝のよし、其聞え有りしかば、諸宗共に參詣す、上人高座にあがり説法して云く、本來の面目と云は、卽身卽佛にして外に佛なし、不立文字にして經意を用ひず、以心傳心に有り、願くは今佛出世ならば、此法林寺一不審かけんに、中々一答もおよぶべからずと放言し給ふ、折節庭の樹のとまりがらす、俄にかしましく鳴出す、上人の此説法を鳴けす所に、上人扨もにくき烏めかな、説法ものべられぬとの給ふ、座中にて一人聲高に、いや烏がわらふよと云ければ、聽衆聞て一同に實にもからすがわらふよ鳴よと云ひやまず、坐中さわぎどうよふする、

〔文恭院殿御實紀附錄一〕天明いつの頃にかありけむ、休息御所の御庭に烏來りて、飼置玉へる鴿を追しかば、近習の人々其烏をとらへ打ころさんとせしを御覽ぜられ、飼烏を捉んとせしは、にくむべきことなれど、子烏へ哺む心ならんか、子を思ふはみな同じかるべしと宣ひ、制し玉ひしとなむ、御年十二三ばかりの時の御事なりとぞ、

〔嬉遊笑覽十二禽蟲〕日光山御宮の邊に鴉二羽あり、二王門前茶店をはなれず、此茶店にて團子を賣る、これをもとめて一ッ宛串を拔て、高く空中になげ上れば、彼鴉出來て、宙にて團子はむ、一ッも落すことなし、按るに筠廊偶筆、楚江富池鎭有吳王廟祠、甘將軍寧也云々、有鴉數百飛集廟旁林木、往來迎舟數里、舞噪帆檣上下、舟人恒投肉空中餧之、百不一墮、其送舟亦然と云り、滇行紀程にも此事出づ、不抱餅餌粒食撒空餧之、群鴉飛舞、接食百無一墮云々あり、

〔甲子夜話二十三〕封内平戸ノ中ニ安滿岳ト云ル森山アリ、山上ニ神祠アリ、久ク靈場ト稱ス、又寺院アリ、頗大寺ナリ、密樹屋ヲ繞ル、後山ニ雙鴉棲メリ、予〇松浦清モ登山ノトキコレヲ視ルニ、翅下ニ一圓白アリ、又寺前ニ一盤ヲ設ク、日々神供ノ食ヲ盤上ニ置ケバ、鴉食シテ殘スコトナシ、從來コ